

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 7 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02061

研究課題名(和文) 申命記主義的文学の歴史性と形成過程の実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical and Inter-disciplinary Study of the Historicity and Formation History of the Deuteronomistic Literature

研究代表者

魯 恩碩 (Ro, Unsok)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：70527142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：5年間の研究期間を通して、研究代表者は研究成果の一部が含まれた2冊の単著と1冊の共著を出版した。さらに、研究代表者は国内外の聖書学会で本研究課題と関連する研究発表を行ってきた。このように様々な媒体を通して、申命記主義的文学の歴史性と形成過程に関する学問的課題について研究し、新しい仮説を提示してきた。特に、「地位の非一貫性」(Status Inconsistency)という社会現象が申命記主義的歴史書を含む旧約聖書全体の形成に大きな影響を及ぼしたという仮説は、日本と世界の旧約聖書学界に学問的刺激を与えるものであったと思われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

様々な媒体を通して、申命記主義的文学の歴史性と形成過程に関する学問的問いについて、聖書文献学、聖書考古学、聖書社会学などのアプローチを学際的および立体的に駆使しながら、新しい仮説を提示してきた。特に、申命記主義的文学が、「申命記向けの対話書」であるという仮説と、「地位の非一貫性」という社会現象が申命記主義的文学を含む旧約聖書全体の形成に大きな影響を及ぼしたという仮説は、日本と世界の旧約聖書学界に新しい観点を提供したと思われる。世界的に著名な研究者たちと共に英語で一冊の書物を出版したことによって、日本を初めとするアジアの旧約聖書学を世界に知らせたことも学術的に意義深い。

研究成果の概要(英文)：Throughout the five-year research period, I have published two monographs and one co-authored book, which included some of the research outcomes. In addition, I have made many academic presentations related to this research topic at conferences of Biblical Studies in Japan and abroad. In this way, through various media, I have diligently researched the academic issues concerning the historicity and the formation history of Deuteronomistic literature and formulated new hypotheses. One specific hypothesis that the social phenomenon of "Status Inconsistency" had a profound effect on the formation history of the entire Old Testament, including the Deuteronomistic literature, can be regarded as an academic stimulus to Old Testament academia in Japan as well as the world.

研究分野：旧約聖書学

キーワード：申命記主義的歴史書

列王記 聖書文献学

聖書考古学 聖書社会学

## 1. 研究開始当初の背景

申命記主義的文学(ヨシュア記、士師記、サムエル記上・下、列王記上・下)は、現代聖書学研究における最大の焦点の一つである。「申命記主義的文学」仮説の創案者であるノート(M. Noth)によると、イスラエルの歴史は、征服期、士師期、初期の王制期、二王国期、ユダ王国の末期の5段階で構成されている。ノートの言う申命記主義的歴史家(Dtr)とは、古い諸史料を受け継ぎながら一人で申命記主義的文学(DH)を形成した人物である。しかし、クロス(F. M. Cross)はノートの仮説を訂正し、申命記主義的歴史家たち(Dtr1 / Dtr2)による二重編集説を主張した。これに続いて、スメント(R. Smend)と彼の弟子たちは、一人の申命記主義的歴史家(Dtr)ではなく、三つの異なる申命記主義学派(律法的申命記主義的歴史家[DtrN]、歴史的申命記主義的歴史家[DtrH]、預言的申命記主義的歴史家[DtrP])が捕囚期中に多重編集を行い、申命記主義的文学を完成したと考えた。

その後、1990年代以降になると、四書(創世記から民数記までの書物)についても申命記主義的歴史家による執筆および編集が行われたという仮説や、いわゆる「資料と呼ばれてきたテキストにも、第二あるいは第三世代の申命記主義学派による編集が行われたと捉える主張などが現われた。また、申命記主義的歴史家の神学的および文体的特徴を決定する基準そのものさえも問い直されることになり、その結果、エレミヤ書を始め、他の預言書にも申命記主義的な編集の痕跡を見いだそうとする観点が登場する。近年、このような申命記主義的文学の研究における混乱はさらに深まり、申命記主義的編集の存在そのものが激しく批判され、今ではかなり多くの学者たちが統一的な申命記主義的文学という概念さえも断念する状態になっている。このような状況は従来の申命記主義的文学研究におけるいくつかの問題点を露呈していると思われる。つまり、申命記主義的文学が伝える出来事がどの程度の歴史性を持つのか、あるいはそのテキストがどのような編集過程を通して形成されたかについて、従来の研究は本文批評、文書批評、様式批評、伝承批評、編集批評などの歴史批評学に基づいた文献学的な研究に偏重した傾向があった。

本研究は、申命記主義的文学の形成過程と歴史性に関する考察が聖書考古学や社会学的なモデルを駆使し、より多面的、かつ学際的に行われなければならないという問題意識から始まった。申命記主義的文学の形成過程と歴史性を聖書考古学や社会学的なモデルなどの手段を用いて実証的に研究することは旧約聖書全体がどのような過程を経て、どのような歴史的な背景の中で記録されたのかを理解する上で重要な手がかりを提供すると思われる。

## 2. 研究の目的

本研究は、申命記主義的文学(ヨシュア記、士師記、サムエル記上・下、列王記上・下)の歴史性と形成過程を実証的に考察し、申命記主義的文学に記述されている出来事がどの程度の歴史性を持つのか、そしてそのテキストがどのような過程を経て成立したかを学際的に理解することを目指す。そのため、従来の申命記主義的文学に関する研究成果を十分取り入れると共に、その

研究方法の限界や方法論的な問題点を明らかにし、申命記主義的文学の歴史性と形成過程をより総合的、立体的、多面的に考察することを目的とする。

さらに、海外の聖書学者たちと協力し、多様な観点から論究された研究成果を英語の共著出版という形で発信することによって、日本を初めとするアジアの旧約聖書学研究のグローバル化に貢献することも本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

歴史批評学に偏重した申命記主義的文学の研究は限界を迎えているため、本研究では聖書考古学や社会学の研究成果を積極的に適用することによって、この限界を打破しようと試みた。なお、申命記主義的文学の歴史性と形成過程を実証的に考察する際に、具体的なサブトピックに関しても国内や海外の研究者との積極的な意見交換を通してそのネットワークを存分に活用し、より豊かな研究成果を引き出すことを目指した。

社会学的なモデルにおいては、様々な理論的枠組みの整合性を検討しながら、Gerhard Lenski が提唱した「地位の非一貫性」(Status Inconsistency)という社会現象のレンズを通して、申命記主義的文学を含む旧約聖書の形成史を捉えるアプローチを行った。さらに、Gerhard Lenski の「古代農耕社会」(Advanced Agrarian Society)という社会学的モデルは、申命記主義的文学を完成した捕囚期以後のユダヤ社会を考察する上で非常に有効な分析的枠組みを提供するため、当時のユダヤ共同体の社会経済的構造を分析するためのツールとして活用した。

捕囚期以後のユダヤ社会における統治階級と支配階級は、同時にペルシア帝国やヘレニズムの諸帝国における家臣階級に当たる役目を果たしていた。ゆえに、ペルシア時代とヘレニズム時代におけるユダヤ社会の構造は、巨視的レベルと微視的レベルに分類して考察する必要がある。巨視的レベルでは、ペルシア帝国およびヘレニズムの諸帝国という全体的な枠組みの中で、Lenski の「古代農耕社会」のモデルを一般理論として用いるべきであるが、微視的レベルでは、捕囚期以後のユダヤ共同体の特殊性に留意し、「崩壊後社会(Postcollapse Society)」と「神殿中心共同体(Citizen-Temple Community)」を特殊理論として活用しながら分析を行った。

聖書考古学においては、イスラエルの考古学的遺跡で出土された動物の骨に関わるデータを収集および整理し、そのデータを申命記や申命記主義的文学の動物に関する記述と照らし合わせ、その一貫性かつ非一貫性を観察する研究を行った。その結果を英語でまとめ、海外の学術誌を通して出版することを目指して準備を進めている。

このように研究代表者は、社会学的なモデルや聖書考古学の方法論を用いて、より包括的、多面的および立体的なアプローチを行い申命記主義的文学に記されている戒律や出来事の歴史性に一步迫ることを目指す研究の方法を試みた。さらに、聖書学や周辺学問の知識が幾何級数的に増加している現代の学問の世界で、このような学際的な研究をより豊かなものにするために、すでにこのような学際的かつ包括的な研究を活発に行っている世界的な研究者たちと緊密に交流しながら、本研究課題に取り組んだ。なぜなら近年は、旧約聖書学の中では世界レベルの豊かな研究成果を出すために国際的な専門家たちを集めた「集団的知性」(Collective

Intelligence)を結成し、一つの学際的な全体像を提示することが新しい研究の方法論として広く使われているからである。研究代表者もこのような世界的な研究動向に歩調を合わせ、海外の聖書学者たちと積極的にコミュニケーションを取りながら、ネットワークを結成し、その繋がりによって一人ではできないより多様な観点に基づく豊かな研究成果を発信することに力を注いだ。

#### 4．研究成果

2015年度には研究史の整理を行いながら、申命記主義的文学の形成史と編集史を理解するための新しいモデルを探る研究を行い、その研究成果の一部を国際基督教大学で開催された「歴史と歴史性(History and Historicity)」というシンポジウムで発表した。また、2016年3月に上智大学で行われた日本基督教学会関東支部会で、研究成果の一部を論文発表という形で発信した。さらに、2016年7月に韓国で行われたSBL (Society of Biblical Literature) International Meetingでも論文発表を行った。2016年9月には南アフリカのステレンボッシュ(Stellenbosch)で行われたIOSOT (International Organization for the Study of the Old Testament) Conferenceでも論文を発表した。

申命記主義的文学における歴史性と形成過程についての研究史を考察することによって、申命記主義的文学に対する独自の観点や理論を持つことができるようになった。これを土台として、2017年に研究成果の一部をまとめた『旧約文書の成立背景を問う：共存を求めるユダヤ共同体』（日本キリスト教団出版局）を出版した。この書物で研究代表者は、申命記主義的文学が「申命記向けの対話書」であるという認識を提示した。「申命記向けの対話書」という概念は、ヨシュア記から列王記までの書物を執筆・編集した複数の申命記主義的グループが申命記神学との対話を通して相互に影響を与え合いながら、申命記主義的文学を完成したことを意味する。2017年8月には、ドイツのベルリンで開催されたSBL International Meetingで「Deuteronomistic History or Deuteronomistic Histories」というタイトルで研究発表を行った。さらに、2017年11月にアメリカのボストンで開催されたSBL Annual Meetingでも研究発表を行った。

2018年7月には、フィンランドのヘルシンキで開催されたSBL International Meetingでユダヤ共同体における「地位の非一貫性」に関する研究発表を行った。その内容をさらに深め、2018年11月にアメリカのデンバーで開催されたSBL Annual Meetingでも研究発表を行った。さらに、研究代表者は2018年にこれまでの研究成果の一部を含めた単著を、世界的聖書学専門出版社であるSBL PressのAncient Israel and Its Literatureシリーズの一冊として出版した。この書物のタイトルは『Poverty, Law, and Divine Justice in Persian and Hellenistic Judah』である。この書では、旧約聖書における国、社会、経済、宗教、および法律全般を横断しながらその相互作用を論究し、そのような相互作用が旧約聖書の形成にどのように関与し、影響を及ぼしたか、そしてそれがどのように共存の共同体を生み出すことに繋がったかを追跡している。特に、聖書文献学、歴史学、考古学、社会学的諸方法論を活用しながら、申命記主義的

文学が完成されたと思われるペルシア時代とヘレニズム時代におけるユダヤ共同体の社会経済的不平等構造を分析した。

最終年である 2019 年度には、これまでの研究成果のまとめとして、世界的に著名な研究者たち (Israel Finkelstein, Shuichi Hasegawa, Thomas Römer, Jin H. Han, Konrad Schmid, Yigal Levin, Yoshinori Sano) と共著で一冊の本を出版した。この書物のタイトルは、『Story and History : The Kings of Israel and Judah in Context』であり、2019 年 6 月に世界的な学術出版社である Mohr Siebeck 社の Forschungen zum Alten Testament というシリーズを通して出版された。この本の中で、共著者たちは列王記に焦点を当てながら申命記主義的文学の歴史性と形成過程に関する学問的問いを追求しており、その問いに答えるために聖書考古学、聖書文献学、聖書社会学、ギリシア古典学などからのアプローチを学際的に駆使し、これまでになかった斬新な見解を提示している。これらの見解やアプローチは、これからの聖書学に大きな刺激を与えられると思われる。それだけではなく、海外の研究者たちと共に英語で一冊の書物を出版したことによって、日本を初めとするアジアの旧約聖書学を世界に知らせたことも学術的に意義深い。

さらに、2019 年 8 月には Scotland の Aberdeen で開催された IOSOT Conference で研究発表を行った。2019 年 10 月と 11 月には日本聖書学研究所公開講座の講師として招待され、五書と申命記主義的歴史書における共存・共生精神に関する講演を行った。5 年間の研究期間を通して、研究代表者は研究成果の一部を含む 2 冊の単著と 1 冊の共著を出版した。さらに、研究代表者は、国内外の聖書学会で本研究課題と関連する多くの研究発表や講演を行った。このように様々な媒体を通して、申命記主義的文学の歴史性と形成過程に関する学問的課題について研究し、聖書文献学、聖書考古学、聖書社会学などのアプローチを学際的および立体的に駆使しながら、新しい仮説を提示してきた。特に、申命記主義的文学が、「申命記向けの対話書」であるという仮説と「地位の非一貫性」という社会現象が申命記主義的文学を含む旧約聖書全体の形成に大きな影響を及ぼしたという仮説は、日本と世界の旧約聖書学界に学問的刺激を与えるものであったと思われる。これからも申命記主義的文学の歴史性と形成過程を学際的に、そして多面的に研究し続け、新しい世界基準をつくり上げることに貢献していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 2件）

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 9件）

1. 発表者名 魯 恩碩
2. 発表標題 五書と申命記主義的歴史書における共存・共生精神
3. 学会等名 日本聖書学研究所、公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Johannes Unsok Ro
2. 発表標題 Moving Beyond the Debate between Minimalists and Maximalists
3. 学会等名 The International Organization for the Study of the Old Testament (IOSOT) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Johannes Unsok Ro
2. 発表標題 Status Inconsistency of Judean Communities in the Persian and Hellenistic Periods
3. 学会等名 The SBL International Meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Johannes Unsok Ro
2. 発表標題 Status Inconsistency in the Biblical Laws and the Psalms of the Poor
3. 学会等名 The SBL Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Johannes Unsok Ro
2. 発表標題 “Deuteronomistic History or Deuteronomistic Histories?”
3. 学会等名 The SBL International Meeting (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Johannes Unsok Ro
2. 発表標題 “The Literary Relationship between Deut 14:4-20 and Lev 11:2-23”
3. 学会等名 The SBL Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Johannes Unsok Ro
2. 発表標題 “Temple and Salvation: A Theological Debate Between Jeremiah 7 and 2 Kings 18-19”
3. 学会等名 The SBL International Meeting (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Johannes Unsok Ro
2. 発表標題 “Jeremiah 's Temple Sermon”
3. 学会等名 The International Organization for the Study of the Old Testament (IOSOT) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 魯 恩碩
2. 発表標題 「エレミヤ書の神殿説教」
3. 学会等名 日本基督教学会関東支部会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Johannes Unsok Ro
2. 発表標題 “Did Jeremiah Preach at the Temple of Jerusalem in the Year 609 BCE?”
3. 学会等名 The International Symposium "History and Historicity" (国際学会)
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Johannes Unsok Ro et al.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Mohr Siebeck	5. 総ページ数 190
3. 書名 Story and History: The Kings of Israel and Judah in Context	

1. 著者名 Johannes Unsok Ro	4. 発行年 2018年
2. 出版社 SBL Press	5. 総ページ数 300
3. 書名 Poverty, Law, and Divine Justice in Persian and Hellenistic Judah	



1. 著者名 魯 恩碩	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本キリスト教団出版局	5. 総ページ数 402
3. 書名 旧約文書の成立背景を問う：共存を求めるユダヤ共同体	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----